

ヨシュア記13-22章

イスラエルの民が相続地を割り当てた事例から学ぶ大切な教訓

導入

11月22日に学んだヨシュア記の個所の続きを学んでいくことにしましょう。

前回の学びは、ヨシュアが一番長い日を過ごした後の10：29で終わりました。3人の王が連合を組んで兵を率い、ヨシュアを倒そうとしました。しかし、ヨシュアは神の助けを得て、一日でその3人の王たちの軍勢をやっつけました。

神はご自身の民を用いて、敵陣の罪を裁かれたのです。ですから、ヨシュアの率いる陣営が必要な助けはすべて与えてくださいました。この場合、ヨシュアの祈りに応えて、神は一日の時間を延ばしてくださいました。ヨシュアが敵陣を完全に打ち破るためです。（ヨシュア10：12-13）

これは信じがたい奇跡ですが、神のみことばが語っているのですから、実際に起こった真実です。

（テモテ第二3：16）

ここで、10章28節から12章を簡単に要約したいと思います。そして、13-22章に記された大切な霊の教訓を学んでいきたいと思います。今回のメッセージは大きく分けてふたつの部分からなります。ひとつめは今日、ふたつめは1月10日にお話します。

（1月3日は新年向けのメッセージをお届けするつもりです。）

10章29節から12章の終わりまでは、約束の地の北部と南部の町にイスラエルの民が攻め入る話です。その締めくくりに、イスラエルの民が打ち負かした王たちの名前が並んでいます。ここで注目すべきことがふたつあります。

まず、勝利を与えてくださったのは神です。10：30、32、34と11：6、8をご覧ください。

次に、ヨシュアが主に従ったことです。ヨシュアはモーセに命じられたとおり、敵を滅ぼしました。11：9、12、15、20をご覧ください。例外はギブオン人のみです。

そして、それぞれの支族に相続地が割り当てられます。

この個所は、自分が相続地を受け継ぐ本人でなければ、読んでいてさほど興味深い個所ではありません。

あなた自身か家族の誰かが日本で広い土地を相続する予定があれば、弁護士が遺言書を読み上げるのを辛抱強く注意して聞くでしょう。

私は日本で土地を所有していませんので、私が死んでも誰にも土地を遺産として残してあげることとはできません。けれども、今回と次回のヨシュア記のメッセージをとおして、イエス・キリストにあっていただいている相続のことを皆さんが思い出すようにお話することはできます。これはとても大切なことです。

相続地の割り当てについて読む中で、日本に住む私たちの日常に応用できる信仰的真理がこの個所に含まれていることがわかるでしょう。

13：1-33には、相続地を最初に受け継いだ支族について記されています。

この支族たちの奇妙なところは、神が相続地として約束なさった場所ではなく、自らが選んだ場所を相続地としたことです。

この選択を理解するために、民数記32章を読まなければなりません。

では、民数記32：1-23を読みましょう。

32:1 ルベン族とガド族は、非常に多くの家畜を持っていた。彼らがヤゼルの地とギルアデの地を見ると、その場所はほんとうに家畜に適した場所であったので、32:2 ガド族とルベン族は、モーセと祭司エルアザルおよび会衆の上に立つ者たちのところに来て、次のように言った。32:3 「アタロテ、ディボン、ヤゼル、ニムラ、ヘシュボン、エルアレ、セバム、ネボ、ベオン。32:4 これら【主】がイスラエルの会衆のために打ち滅ぼされた地は、家畜に適した地です。そして、あなたのしもべどもは家畜を持っているのです。」32:5 また彼らは言った。「もし、私たちの願いがかないますなら、どうかこの地をあなたのしもべどもに所有地として与えてください。私たちにヨルダンを渡らせないでください。」32:6 モーセはガド族とルベン族に答えた。「あなたがたの兄弟たちは戦いに行くのに、あなたがたは、ここにとどまろうとするのか。32:7 どうしてあなたがたは、イスラエル人の意気をくじいて、【主】が彼らに与えた地へ渡らせないようにするのか。32:8 私がカデシュ・バルネアからその地を調べるためにあなたがたの父たちを遣わしたときにも、彼らはこのようにふるまった。32:9 彼らはエシュコルの谷まで上って行き、その地を見て、【主】が彼らに与えられた地に入って行かないようにイスラエル人の意気をくじいた。32:10 その日、【主】の怒りが燃え上がり、誓って言われた。32:11 『エジプトから上って来た者たちで二十歳以上の者はだれも、わたしがアブラハム、イサク、ヤコブに誓った地を見ることはできない。彼らはわたしに従い通さなかった。32:12 ただ、ケナズ人エフネの子カレブと、ヌンの子ヨシュアは別である。彼らは【主】に従い通したからである。』32:13 【主】の怒りはイスラエルに向かって燃え上がったのだ。それで【主】の目の前に悪を行ったその世代の者がみな死に絶えてしまうまで彼らを四十年の間、荒野にさまよわされた。32:14 そして今、あなたがた罪人の子らは、あなたがたの父たちに代わって立ち上がり、イスラエルに対する【主】の燃える怒りをさらに増し加えようとしている。32:15 あなたがたが、もしそむいて主に従わなければ、主はまたこの民をこの荒野に見捨てられる。そしてあなたがたはこの民すべてに滅びをもたらすことになる。」32:16 彼らはモーセに近づいて言った。「私たちはここに家畜のために羊の囲い場を作り、子どもたちのために町々を建てます。32:17 しかし、私たちは、イスラエル人をその場所に導き入れるまで、武装して彼らの先頭に立って急ぎます。私たちの子どもたちは、この地の住民の前で城壁のある町々に住みます。32:18 私たちは、イスラエル人がおのおのその相続地を受け継ぐまで、私たちの家に帰りません。32:19 私たちは、ヨルダンを越えた向こうでは、彼らとともに相続地を持ちはしません。私たちの相続地は、ヨルダンのこちらの側、東のほうになっているからです。」32:20 モーセは彼らに言った。「もしあなたがたがそのようにし、もし【主】の前に戦いのため武装をし、32:21 あなたがたのうちの武装した者がみな、【主】の前でヨルダンを渡り、ついに主がその敵を御前から追い払い、32:22 その地が【主】の前に征服され、その後あなたがたが帰って来るのであれば、あなたがたは【主】に対しても、イスラエルに対しても責任が解除される。そして、この地は【主】の前であなたがたの所有地となる。32:23 しかし、もしそのようにしないなら、今や、あなたがたは【主】に対して罪を犯したのだ。あなたがたの罪の罰があることを思い知りなさい。

このように、モーセはこのふたつの支族に対して約束しました。その内容は、彼らがヨルダン川を越えてイスラエルの他の部族たちと戦うなら、その後には彼らはヨルダン川の向こう岸にある自分たちの選んだ土地に帰ってよいというものでした。

ヨシュア4：12から、この二部族はヨルダン川を越えてイスラエルの他の部族とともにカナンの地を獲得するために戦ったことがわかります。

ほとんどの土地は獲得できましたが、まだ獲得すべき土地がありました。

ヨシュア 13:1 ヨシュアは年を重ねて老人になった。【主】は彼に仰せられた。「あなたは年を重ね、老人になったが、まだ占領すべき地がたくさん残っている。

このとき、ヨシュアはすでに90歳か100歳という高齢でした。もしかすると、モーセとの約束を守ってこの二部族がヨルダン川の向こうの相続地にちゃんと帰れるようにしておきたかったのかもかもしれません。

ヨルダン川の対岸の土地は、牧畜には適していたようですが、後になって深刻な問題が生じました。モアブ人やアモン人といった異教の民に囲まれ、イスラエルの他の部族たちとはヨルダン川という大河で隔てられていることで、この二部族は攻撃されやすい環境に身を置くことになってしまいました。

攻撃されても、助けを求めるところがありません。また、子供たちは外国人と結婚して、土地を与えてくださった神のことを忘れてしまうという危険性もありました。他にも、近隣の外国人が拝む異教の神や偶像を信じるという誘惑もありました。

そして、まさにそのとおりになりました。

歴代誌第一5：23-26を読みましょう。

5:23 マナセの半部族の人々は、この地、すなわち、バシヤンからバアル・ヘルモン、セニル、ヘルモン山に至る地に住み、その数はふえた。 5:24 彼らの一族のかしらたちは次のとおり。エフェル、イシュイ、エリエル、アズリエル、エレミヤ、ホダブヤ、ヤフディエル。この人たちは、勇士であり、名のある人々であって、彼らの一族のかしらであった。 5:25 ところが、彼らは、その父祖の神に対して不信の罪を犯し、神が彼らの前からぬぐい去って滅ぼされたその地の民の神々を慕って不貞を犯した。 5:26 そこで、イスラエルの神は、アッシリヤの王プルの霊と、アッシリヤの王ティグラテ・ピレセルの霊を奮い立たせられた。それで、彼はルベン人とガド人、およびマナセの半部族を捕らえ移し、彼らをハラフと、ハボルとハラとゴザンの川に連れて行った。今日もそのままである。

13章から学べる原則は警告です。

1. 信徒がイエス・キリストにおいて受け継ぐものは非常に尊いものです。未信者に受け入れてもらうためや、金銭的利益のために、決して信仰を妥協してはいけません。

13章に登場する二部族は、牧畜には最適の場所でしたが、信仰生活にはもっとも適さない選択でした。

これと関連して、私たちに課題を突き付ける聖書箇所が新約聖書にふたつあります。

ひとつめは、ヤコブ4：4です。

ヤコブ4：4 貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。

私たちクリスチャンはこの世に半分足をつっこむような生き方やイエス・キリストに対する信仰を妥協するような習慣には関わってはいけないと、この箇所をはっきり教えます。

これは、新年に神社仏閣を参拝することも含まれます。

その場所に行ってトラクトやヨハネの福音書を配ったりするのはけっこうですが、参拝するという習慣に参加するのはいけません。

日本のような場所では、自分の行いをしっかり吟味し、自分たちの違いをはっきりさせなければなりません。それによって職場での昇進のチャンスや同僚との関係が損なわれたとしてもです。

次のみことばは、ヨハネ第一2：15-17です。

ヨハネ第一2：15-17 2:15 世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。 2:16 すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。 2:17 世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行う者は、いつまでもながらえます

神は、私たちが心を尽くして神を愛することを望まれます。もし私たちが他のものを愛するなら、それがどれほど大切なものであったとしても、私たちが神の愛から引き離す道具として悪魔に利用されてしまいます。

悪魔は、私たちが気づかないよう、徐々に私たちが神から引き離します。

新年を始めるにあたり、霊の健康診断を試みるのがよいでしょう。

人生で神を何より優先しようとするれば、神はすべての必要を備えてくださるでしょう。

それが、マタイ6：33の教えです。

マタイ 6:33 だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。

では、次の相続地を見ていきましょう。14章1-15節を読みましょう。

14:1 イスラエル人がカナンので相続地の割り当てをした地は次のとおりである。その地を祭司エルアザルと、ヌンの子ヨシュアと、イスラエル人の部族の一族のかしらたちが、彼らに割り当て、14:2 【主】がモーセを通して命じたとおりに、九部族と半部族とにくじで相続地を割り当てた。14:3 モーセはすでに二部族と半部族とに、ヨルダン川の向こう側で相続地を与えており、またレビ人には、彼らの中で相続地を与えなかったからであり、14:4 ヨセフの子孫が、マナセとエフライムの二部族になっていたからである。彼らは、レビ族には、その住むための町々と彼らの所有になる家畜のための放牧地を除いては、その地で割り当て地を与えなかった。14:5 イスラエル人は、【主】がモーセに命じたとおりに行って、その地を割り当てた。14:6 ときに、ユダ族がギルガルでヨシュアのところに近づいて来た。そして、ケナズ人エフネの子カレブが、ヨシュアに言った。「【主】がカデシュ・バルネアで、私とあなたについて、神の人モーセに話されたことを、あなたはご存じのはずです。14:7 【主】のしもべモーセがこの地を偵察するために、私をカデシュ・バルネアから遣わしたとき、私は四十歳でした。そのとき、私は自分の心の中にあるとおりを彼に報告しました。14:8 私といっしょに上って行った私の身内の者たちは、民の心をくじいたのですが、私は私の神、【主】に従い通しました。14:9 そこでその日、モーセは誓って、『あなたの足が踏み行く地は、必ず永久に、あなたとあなたの子孫の相続地となる。あなたが、私の神、【主】に従い通したからである』と言いました。14:10 今、ご覧のとおり、【主】がこのことばをモーセに告げられた時からこのかた、イスラエルが荒野を歩いた四十五年間、【主】は約束されたとおりに、私を生きながらえさせてくださいました。今や私は、きょうでもう八十五歳になります。14:11 しかも、モーセが私を遣わした日のように、今も壮健です。私の今の力は、あの時の力と同様、戦争にも、また日常の出入りにも耐えるのです。14:12 どうか今、【主】があの日約束されたこの山地を私に与えてください。あの日、あなたが聞いたように、そこにはアナク人がおり、城壁のある大きな町々があったのです。【主】が私とともにいてくだされば、【主】が約束されたように、私は彼らを追い払うことができますよ。」14:13 それでヨシュアは、エフネの子カレブを祝福し、彼にヘブロンを相続地として与えた。14:14 それで、ヘブロンは、ケナズ人エフネの子カレブの相続地となった。今日もそうである。それは、彼がイスラエルの神、【主】に従い通したからである。14:15 ヘブロンの名は、以前はキルヤテ・アルバであった。アルバというのは、アナク人の中の最も偉大な人物であった。そして、その地に戦争はやんだ。

カレブがモーセの約束した土地を受け継いだのは、85歳のときでした。彼はすでに高齢でしたが、11-13節にご注目ください。

14:11 しかも、モーセが私を遣わした日のように、今も壮健です。私の今の力は、あの時の力と同様、戦争にも、また日常の出入りにも耐えるのです。14:12 どうか今、【主】があの日約束されたこの山地を私に与えてください。あの日、あなたが聞いたように、そこにはアナク人がおり、城壁のある大きな町々があったのです。【主】が私とともにいてくだされば、【主】が約束されたように、私は彼らを追い払うことができますよ。」14:13 それでヨシュアは、エフネの子カレブを祝福し、彼にヘブロンを相続地として与えた。

カレブは老人でしたが、年老いたからといって神に仕えたり、与えられた土地を獲得したりできないとは考えませんでした。実際に戦いで駆け回ることしなくても、戦いの指揮をすることはできます。また、兵士が自分の力ではなく神の力に頼ってしっかり戦うよう励ますこともできます。

ふたつめに学べる原則は次のとおりです。

2. 聖霊の力によれば、信仰を獲得するのに年が寄りすぎたということは決してありません。

カレブは85歳で、巨人と呼ばれる種族だったアナク人を打ち負かそうとしていました。

60歳を超えともう神の働きに役に立てないと思っているクリスチャンがたくさんいます。長年働いて疲れ果て、もうゆっくりして他の人たちが教会の働きも世界の宣教の働きもすればよいと思うのです。

神に仕えるのを完全にやめるとするのは、聖書の教えに則った考え方ではありません。高齢になると、仕え方が変わるかもしれませんが、いくつになっても、聖霊の力によって信仰の高嶺を目指すことはできます。

聖書にも、教会の歴史にも、神が高齢者を用いてご計画を成就してくださった例は数多くあります。

神がエジプトの奴隷生活から300万人近くものユダヤ人を助け出すようにモーセを召されたとき、彼は80歳でした。

使徒7：23-30は、モーセはエジプトの王家で40年間過ごし、次の40年を羊飼いとして生き、その後神がモーセを人生最大の奉仕へと召されたと語ります。

神がアブラハムを信仰によって歩み出すように、どこに行くかも知らずに出かけるよう召されたのは、アブラハムが70歳くらいのときでした。アブラハムは、70歳にして、信仰によって応答したのです。

アブラハムは175歳まで生きました。（創世記25：7）皆さんが70歳で神に仕えるよう召されたら、100年間仕えることはおそろくないでしょう。けれども、10年くらいならお仕えできるのではないのでしょうか。

私自身、60歳で日本に戻るよう召された時は衝撃を受けました。

けれども、神の召しに従って来てよかったと思います。もしかしたら10年くらいはここでお仕えできるかもしれません。それは神のみがご存知です。

神がご自身のご計画のために高齢者を用いてくださることについてポジティブなことをいろいろと申し上げましたが、高齢になってからの奉仕についていくつか大切なことをお伝えしたいと思います。

1. 高齢者は、意気込み過ぎないことです。年を取ると、体が思うように動きません。ですから、やり過ぎないように注意しましょう。
2. 高齢者は変化を好みません。神のみことばを妥協しない範囲内なら、違ったやり方にもオープンであるべきです。
3. 高齢者は年少者を励まし、良いお手本を示しましょう。若い人たちといっしょに過ごし、悩みや問題を理解してあげる必要があります。

年を取っているということは、長く生きているということですから、人生経験も積んでいます。若い人たちがさらに神を信頼していけるよう励ますことができるかもしれません。

4. 多くの高齢者は、祈りにたっぷり時間を取ります。悪魔はほかの二義的なことに気を逸らそうとしますが、その手に乗らないでください。祈りは最大の奉仕です。とてもたいへんな働きですが、その価値は十分にあります。成果はすぐには見えませんが、天国に行ってから、昔の祈りの答えに驚くことになるかもしれません。

50歳以上の皆さん、2016年は新しい働きを神が与えられると信じてみませんか。昔の奉仕に再び戻ることかもしれませんし、違ったことをするのもかもしれません。または、新しい働きを神に求めることかもしれません。その内容が何であれ、年寄り過ぎて神に仕えることはできない、という悪魔のささやきに耳を貸さないでください。

高齢で神の奉仕を始めるには、神に人生を完全にささげ、何をするかを神が望んでおられるのか尋ね求めることです。これが非常に重要です。神からの確信なしに経験や賜物を持たない奉仕に関わってははいけません。

では、カナンの相続地から応用できる3つめの原則に進みましょう。

神の選びの民は、カナンを相続地として得ました。その目的のひとつは、周囲の国々に証を立てる民となることです。

イエス・キリストの信徒である私たちは、すでに相続を得ています。

それは土地ではなく、「霊のいのち」です。

では、ペテロ第一1：3-7を読みましょう。

1:3 私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。**1:4** また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。**1:5** あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現されるように用意されている救いをいただくのです。**1:6** そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまな試練の中で、悲しまなければならないのですが、**1:7** あなたがたの信仰の試練は、火で精錬されつつなお朽ちて行く金よりも尊く、イエス・キリストの現れのとときに称賛と光栄と栄誉になることがわかります。

相続とは、誰かが死んだときに受け取るものです。不動産や金銭や高価な所有物などがあるでしょう。お金は使えばなくなりますし、家もいつかは古くなります。けれども、霊のいのちという相続は違います。

私たちがこれを相続するために、誰かが死ななければなりませんでした。

イエスは、遺言書をお残しにはなりませんでしたが、ヨハネ17：20-24に最後の遺言となる言葉を残されました。

17:20 わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします。 17:21 それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。 17:22 またわたしは、あなたがわたしに下さった栄光を、彼らに与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです。 17:23 わたしは彼らにおり、あなたはわたしにおられます。それは、彼らが全うされて一つとなるためです。それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたこととを、この世が知るためです。 17:24 父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったものをわたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。

ローマ8：17は、私たちはイエス・キリストと共同相続人だと語ります。つまり、相続を分かち合っているということです。

ペテロ第一のみことばに、イエス・キリストからいただいた相続についていくつかのことが記されています。

1. 朽ちない資産である。(ペテロ第一1：4)

それは、何物にも壊されないということです。私たちのために天国に蓄えられているのです。

この世ではすべてを失うかもしれませんが、イエス・キリストからの相続は失うことはありません。

2. 汚れることがない。(4節)

汚れが付いたり、価値が下がったりすることはない、という意味です。すべての意味で完ぺきなものです。最高のプレゼントです。

3. 消えていくことがない。(4節)

永遠のものなので、古びることはありません。劣化することもなく、がっかりさせられません。この世は時間の制限があるので、私たちに永遠を理解することはできません。永遠に一番近いのは、アフリカ時間でしょう。

アフリカ時間を初体験したのは、私がロンドンで牧師をしていたときです。その教会にはアフリカの人がたくさんいました。

礼拝は午前11時に始まります、と伝えると、彼らは11時半かそれより遅れて来ます。自分たちの都合のよい時に来るのに慣れてるからです。説教の途中で人数がどんどん増えていく、という状態でした。

最後になってもう一度説教をやりなおしたとしても、ほとんどの人は始めにいなかったもので、きっと誰も気にしないでしょう。

永遠もそんな感じですよ。急ぐことはありません。イエスとともに相続したものを味わいゆっくり過ごせます。

クリスチャンなら、神が天国に資産を蓄えてくださっていることを思い、元気を出しましょう。

クリスチャンでない人は、それでも神が愛してくださっていることを覚えていてください。あなたの重荷を代わりに背負ってあげたいと神は願っておられます。

あなたが背負っているものは、これまで自分の思いどおりに生きた結果です。

私たちは創造主である聖なる神と引き離されていると、聖書は語ります。それは、人類の父母アダムとエバが神に背いて人類に罪をもたらしたからです。

イエスは、ひとつの目的のためにこの世に来られました。その目的とは、神のもとに帰る道を開くことです。そうして、私たちが神とともに天国で永遠を過ごすためです。

まだイエスを知らないのであれば、**2016年**にはぜひ、イエスを知ることを考えてみてください。

イエスをもう知っている人は、みことばに親しみ、生活にもっとイエスに関わっていただくことで、さらにイエスを知って行ってください。

では、祈りましょう。